

# PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1998年1月 No.87

## 胎児を守る運動

### 安楽死の行く末

英語で安楽死を意味する言葉 Euthasia は、ギリシャ語の「良い死」、「慈悲による死」という二つの語源に由来している。平均的な生活を送っている人間ならば、安楽死の目的は「不治の病にある患者の苦しみをやわらげるため」であるという話を聞いたことがあるであろう。ただし、この位置付けは安楽死賛成派の人間が近年勝手に定めただけで、安楽死という言葉には隠された意味がある。安楽死とは、続けるだけの価値のない苦しみを終わらせるのではなく、続けるだけの価値のない命を終わらせることである。オランダの心臓病の権威であるリチャード・フイーニセンの次の言葉に注目してほしい。「安楽死に対する根本的な疑問は人間の自由と選択する権利を追求するためのものなのか、それとも弱者、老人、ほかの人と違う人間などを排除するための暴力的措置なのかということである。両方が答である。」

「慈悲による死」という意味での安楽死はとりたてて新しい概念ではない。しかし、弱い要素を排除することで「人類の進化」をはかるうという目的でしか安楽死をとらえていかなかった安楽死の提唱者達

の間で、慈悲というものが安楽死と結び付けられるようになったのはごく最近のことだと言える。社会的進化論と呼ばれるこの「人類の進化」という考え方によれば、「弱者を助けずに、逆に滅ぼすことが強者に与えられた使命である」とされている。社会的進化論を積極的に支持する人はまだまだおり、特に米国とイギリスの社会学者と政治家の間で顕著であるようだ。

「安らかな死」の話はひとまず置いておこう。安楽死についてはまだほかに問題がある。つまり、境界線はどこか、ということ。心身を衰弱させるだけの病気に苦しむ人の命を終わらせることに一度賛成してしまえば、それ以後は安楽死を人口過多、飢餓、貧困に悩む地域に対するもっともな解決策としてとらえるのに以前より抵抗がなくなるのではないだろうか。もっとも、近頃の安楽死賛成派はこういったあからさまな希望を自分の政治的概念にうまく押し隠すだけのずるさはある、民主的なメディアに携わっている彼らの知人はこれにまんまとだまされ

て、報道番組、映画、テレビの特番などで安楽死実現をせつせと訴えているような現状である。

自らの希望による安楽死はあくまでも個人の選択なのであるから、本人以外迷惑するものなどないなどというのは、大変なインチキである。そもそも、自殺したいと言ふ人のほとんどは、身体的または肉体的にそのとき経験している問題を誰かに解決してもらいたいと思っているものである。セラピーや痛みに対する治療などによって、真の意味の助けを得ることができれば、死にたいなどという考えはふっとんでしまうのではないだろうか。人の助けを借りることの少ない人間は、しばしば深刻なうつ状態にあると診断されることがあるらしい。次に、完全に誰とも接することがないというような、本当に他人から切り離された生活をしている人間などほとんどいない。自

### 我々の行く末

安楽死は、「誰々は生きるに値しない」といつような「生命の質」に固執した概念に強く基づいている。だが、ここで皆さんに考えていただきたい。誰にとつて値しないというのだろうか。

ちょっと前のことだが、ニューヨーク市で大学の討論会があった。その場で誰かが、出生率の低下は人口における老人の割合を大きく増大させるであろうというようなことを言った。これに対して別の学生がこう言った。「60歳以上に安楽死が適用されるようになれば、問題は解決される」と。参加者達のこのときの拍手の大きさを察すると、この考えはおおいに受け入れられたようであった。

これが我々の行く末なのだろうか？ 自発的な安楽死はいずれは強制的な安楽死へと変わっていくのだろうか？ 我々は、かつてヒットラーが「民族の純血化」という名目のもとに五百万から六百万五百万の人間を大虐殺したあの暴挙から何も学んではいなかったのだろうか？ もしそうであるならば、我々には何の未来もない。

ジャック・ボルト



# 新しい生命

私の家族は、今十五歳の男の子と、十二歳の女の子と、十一歳の男の子、そして家庭を大切に考えてくれる夫と五人家族です。

母である私は、保健婦という肩書きを持ち時々仕事にも出かけています。保健婦という職業を持つ私に要求されるのは、まず人様の話を聞くことができるか(気持ちが悪くても聞けるか)ですが、簡単なようでとても難しいのです。

あるカウンセリングのグループに入れていただき、勉強させて頂いているのですが、その仲間の一人から頂いた言葉に「悲しき、寂しき、つらさを通らなければ人は人になれない」。私にはこういう気持ちの状況が頭では理解ができて気持ちがついていかなかったのです。悲しい、寂しい、つらいという状況を私は、暗い部分として避けていて、明るい所にいつも輝いていた私でした。でも、そこに私自身の行き詰まりを感じていたのです。暗い部分、私が居たくない所に居れる自分、そこで感じ取れるものを大切にしない思いが膨らみ、神様にお願ひしました。「どうぞ体験させてください」と。すぐに願ひは叶えられませんでした。四十四歳にして妊娠という形で私に与えられたのです。

消すに消せない、まさに私自身にびつたり形として下さったのです。希望はしていたものの、現実を受け止めるにはかなりの労力が必要でした。まさに私自身との対決でした。夫にはすぐに話を聞いて、受け止めていくれたものの、周囲の人には話せずにいました。その時の思いは、まさに暗闇の中に一人、ぼつんといるような孤独感を味わっていました。暗い部分というのは、まさに私自身の自尊心を傷つけられる部分だったようです。(後に理解できた所です。)それをまざまざと新しい生命が、私自身に教えてくれているのだと分かってきた時、私自身が神様の力によって、新しい生命の息吹(聖霊)にて、生まれ変わる時なのだと思わせて頂きました。

生活の現場である社会の状況に惑わされそうな時、何を基本にして生きるかと考えた時、それは神様の思いの他ないと感じています。

神様は私が願ったとき、私に必要なものを必要な時に下さるのだと信じています。きつとこのことを通らなければ私自身との出会いも神様との出会いも味わえなかつたと思っています。そして、生活の現場では、さつ

そく高齢出産という事で病院側は「先天異常の検査(ダウン症)を早くしなければ墮胎ができません。なる時期になってしまつ。」と言われましたが、私の気持ちはもうどんな子どもでも新しい生命を受け入れていく決心ができていましたので「検査はしません。」と言いました。

今、もう臨月に入り、夫や子ども達も生まれてくる子待ち望んでいてくれるこの喜びに日々を過ごしています。

妊娠は、母体としては自然の摂理の筈なのに、社会が特別の事のように受け止めてしまつて為受け止める母親や家族も、ゆがんで受け止めてしまい、望ましい結果を招いてしまつ事にもなつてしまします。現代社会は母子にとつて生きにくくなっているのかもしれない。私自身も心から喜びにあふれ、「子どもが出来たのよ。」と言って、共に新しい生命を喜びあえる社会を築いていくことができたらと思っています。

新しい生命は、神様からの預かりものなのです。家庭と社会に暖かく見守られ、育まれ、最後に神様の元にお返ししていくのです。私もきつとイエズス様に迎えられ、天国の門の中に入れて下さると信じています。

高見たつ子

# ある十代の妊婦への手紙

つまり、君は中絶しようかと思っているわけだ。なるほど。君は今、とっても孤独でどうしていいかわからず、落ち込んでいるんだらうね。人生が変わつちやうような気持ちなんだらう。もう学校に行くこともできなくなるかもしれないしね。子どもを育てるなんて無理かもしれない。子持ちの女の子なんて誰もデートに誘ってくれないだらう。君の今の気持ちは、誰もわかってくれない。

でも、神様は違うよ。神様はわかってくださる。この世が始まって以来、神様はずっと君のおなかの子どものことをご存で、この世に産まれてくるべく計画されていたんだ。そう、ちよつとマリア様のおなかに御子イエスを宿されたようにね。

考えてもごらんよ。もし、マリア様がイエス様をお妊みになつた時に中絶でもしていたら、僕達はどうなつていただらう。世界は今みたいじゃなかつたかもしれない。誰が罪を許してくれただらう。永遠の命はありえなかつたに違いない。だって、救世主が産まれる前に殺されてし

まったんじゃあね。

君のおなかの子だつて産まれてくる意味のある子どもなんだ。その子は大きくなつたら、ガンを治療する医者になるかもしれないし、貧しい人達の家に屋根を取りつける大工にだつてなるかもしれない。一年に二百万も赤ん坊が死んでゆく。母親が自分の生活のことしか考えず、赤ん坊のことなんて思う余裕もないのさ。どうかそんなことはないでほしい。そして、自分とは別の心臓の音に耳を傾け、神が特に選んで君に託されたその命のことを考えて欲しい。その子を愛してあげるんだよ。

友より

# 決意を持ち続けること

ウイリアム・シェイクスピアがリチャード 世で書き記したように、人はたびたび、あの時こうしていれば今頃こんな人生だった、昔に戻る事が出来たらと思うものである。誰しも将来のことをいちいち考えて行動するわけではない。もしそれが出来たら、昔に戻ってもう一度やりなおしたいなどと過去を悔やんだりすることもないだろう。

新年が近づくと、人々は慣習にのっとってあることについて話す。とはいっても、この慣習を真面目に受け取っている人は少ない。抱負を語るという慣習である。年末年始のお祝い事でゼいたくいな食事を取りすぎてしまった後は、減量しようと思意する人も少なくない。お金をたくさん使い過ぎたと感じている人は、もっと財布のひもをしめようと心に誓う。夢がある人は、夢を実現するためにもっと努力しようと思意する。いろいろ決意する人はたくさんいるが、実際にやり遂げる人はごく少なく、新しい年の人が春頃までには、新年に決意した事など忘れてしまつ。

いものか？私がついに、聖書には我々の抱くあらゆる疑問に対する言葉が記されている。

新年が近づくとつれ、私は歴代の書下七：14で神がソロモンにした約束の箇所を思い出す。「私の名で呼ばれるこの民がみずからへりくだって祈り、悪の道捨てて私の顔をさがし求めるなら、私は天からその祈りを聞き彼等の罪を許し地を元にもどそう。」この約束は、イスラエルの人々に対してなされたものであるが、私達に対しても同じである。この言葉をよく解釈すると、私達の国を神の望まれるような地にするための決意が出来ると思う。「私の名で呼ばれるこの民」とはどういう事か。神の望まれるような国を建設する事について語る時、よく政治家や教育体制、その他自分達の価値観に反するものに対する不満をいいつける人々がいる。しかし、これは神がこの言葉の中で言い表している人の行動ではない。神は「私の名で呼ばれるこの民」とおっしゃっている。つまり、キリスト信者を指しているようである。

「みずからへりくだって祈り、悪の道捨て、私の顔をさがし求める」とはどういうことか。へりくだるという動詞には、次のような意味がある。(一)高ぶらないこと。(二)謙虚なこと。私達は、高ぶらず、謙虚に生きなくてはならないということである。

私達クリスチャンは、良い行いをし、自己中心的な生活には背を向け、神の意志に従わなければならない。簡単な事ではないが、やらなければならない。「私は天からその祈りを聞き彼らの罪を許し地を元にもどそう」とはどういうことだろうか。これが神の約束されたことである。神は私達の祈りをお聞きになり、私達の罪をお許し下さり、私達の土地をいやして下さる。

私達がこの契約をするのは簡単なことではない。だが、その見返りはすばらしい。イエス様もマテオによる福音書の十一：30でこう語っておられる。「私のくびきは軽く、私の荷は軽い。」もし私達が本当に、罪に背を向け神の意志に従おうとするならば、神は私達がより神のこころざしに近づけるよう助けて下さり、私達が果たすべき行為は、決して重荷ではなく、喜びに変わるだろう。

神はまた、歴代の書で警告をお与えになつておられる。七：19、22では、もし信者が神に背いたら、罰をお与えになると記されている。歴代の書 七：21、22にこうある。「主はなぜこの国とこの神殿にこのような仕打ちをされたのだろう」と問うだろう。すると人々は答えるだろう。「あの人たちはエジプトの地から導き出してくれた先祖の神なる主をうち捨て、ほかの神々に

りつき、それを拝んだりそれに仕えるようになった。だから主はこれほどの災害を彼らに投げつけられたのだ。」私達の行動には、すべてなんらかの結果がついてまわる。良い行いには良い事が、悪い行いには悪い事が起こるものである。これは、神のなせる業である。私達はこの事実を受けとめ、自分達の行いの道標としなくてはならない。

誠実で高潔な人ならば、中絶を廃する国家を建設するべく努めるべきだろうか？無論である。しかし、並大抵ではないこの務めを果たすには、祈って神の御力を求めなければならない。神は、国家で一つの目標にだどり着くためには、まず彼の信者が自らの罪を悔い、神のご意志に従い始める事であると示して下さっている。この事を、我々の毎年の決意とし、この国が神の御力で導かれるようにしようではないか。そうして初めて、私達は過去を振り返る事なく、未来だけを見つめて生きる事が出来るだろう。

# エレミヤの心はラムの町に向けられていた

「罪なきものの死を嘆き悲しんで」

エレミヤは未来を見通して、自分の目に映り、心で感じられる苦痛にたじろぎました。彼の心は、ラムという町に向けられていました。それはユダ王国のエルサレムの北方、ちょうど20キロメートルのところにあるベニヤミン族の町でした。彼は苦悩のあまり声を上げて「主は仰せられる、『ラムに声が聞こえる。いたみ、嘆く声、ラケルは子らのために泣く。子らがもういないので、女は慰められるのをいとう。』と叫ばざるをえなかったのです。」

司祭のエレミヤはバビロンに滅ばされる前のユダ王国で預言者としての務めを続けながら、いつこの言葉が成就されるかと思いを巡らせていました。しかし、神の預言者として彼は、神が恐らく、この言葉どおりのことを起こされると確信していません。多分、自分の生きている間ではないであろうけれども、このことがきつと起こるのであると確信していません。エレミヤはその選ばれた言葉について深く

考えました。それから彼はヘブライ語でそのラムの言葉の真の意味をよく考え、見きわめました。

エレミヤがその嘆きの言葉を叫んでから何世紀も時が経ちました。多くのものがそれらの言葉を忘れてしまっていました。しかしイスラエルのその時の国王であるヘロデによって建てられたエホバの神殿にその時集まっていた宗教指導者達はそうではありませんでした。ヘロデは興味深い人格の持ち主でした。彼は建築技術を知り、物事を組織的に行なう能力を持ち、国中に巨大な記念碑や要塞を建設した。彼はバビロンの人々で有名な、彼はローマ帝国に

ましたが、陰で操ることはしなかった。人々は彼への絶対的な忠誠心を保っていました。その結果として、彼の心の中の葛藤は表面には現われず、激怒した場合に吹き出す程度でした。博士達が人々に「ユダヤの王としてお生れになった方はどこにいるのですか。」と尋ね始めた時に、エルサレムにはただならぬ混乱が起こりました。彼らは何度も何度も町の人々に尋ね、人々を悩ませました。そのことはすぐにヘロデのもとに届き、王も悩まされました。「お生れになったユダヤの王」とは何を意味しているのか。私はイスラエル全土を支配する王ではないのか。この者達は何者なのか、そしてどこでこのことを知ったのか」と。それから、ヘロデは、これらの博士達がイスラエルの救世王であるキリストを捜していることがわかりました。

ヘロデはいつものように、行動計画を練るために情報を集め始めました。彼は祭司長や立法学者達を集めて、この救世王がどこに生まれることになっているのかを尋ねました。「ベツレヘムです。」とヘロデは告げられました。まわりのユダヤ人に自分の意図を気づかれないで済んだので、彼は秘かに博士達と会い、彼らの話を聞き、この救世王がいつ生まれることになっているのかというところについての情報を入手しました。立法学者や祭司長から得たことをもとに、彼は博士達に、「ベツレヘムへ行つて、その幼な子を注意深く探せ。そして見つけたら私に報告せよ。私もその子を拝みに行くから。」という命令を考えて、博士達をベツレヘムへ行かせました。ヘロデは不安でしたが、危険を冒すことはしませんでした。

それから数日間ヘロデ王にとつてつらいものでした。日が移り変わって新しい週になり、やがて新しい月になりましたが、博士達が現われる様子は全くありませんでした。「なぜこんなに時間がかかっているのだろうか。」と彼はいぶかしがりやになりました。この新しい王のことが絶えず彼の心に懸かっています。彼は、ユダヤ人がどのような反応をするだろうか、そのことが彼の支配と権力にどのような影響を考えるだろうかとあれこれと考えました。彼は博士達の帰還を待ちわび、幾夜も、行ったり来たりして眠れない夜が続きました。時々、彼は博士達が誤っていたのだと思い、またある時は

博士達が理解していることは正しいと思ったりもしました。葛藤が彼の苦悩する心の中で渦巻き、彼をやつれさせました。彼はだんだん苛立ってきました。というのは、博士達はもう帰ってきていない頃だったからでした。そのことが彼の動揺を大きくさせました。しかし彼らが帰ってくるのが遅れているということがかすかな望みは残ったままでした。多分、博士達はまだ救世主と呼ばれるこの幼な子を発見していないであろうと。

ヘロデは国中に放つておいた密偵の中から信頼のできる、地位の低い者を密かに呼び寄せました。密かに王の前に呼び出し、褒美を約束することで彼らの自尊心をくすぐりながら、彼は自分が探しているものを彼らに漠然と説明し、彼らをベツレヘムにさしむけ、密かに様子を探らせました。

数日後帰ってきた彼らは、ヘロデに当惑させるような知らせをもたらしました。彼らは王にベツレヘムのことかきこいで語られている話、すなわち、その町の宿屋にやつて来た羊飼いの所へ天使が訪れ、妻が宿屋のかいば桶の中でイエスと名付けられた子どもを産んだヨセフという名前の男を見つけた話を告げました。また、ヨセフという男が泊まった家でこの幼な子を捜し当てた博士達の話や、彼らがこの幼な子に高価な贈り物を

持ってきた話もしました。ヘロヨセフという名の男を見つけてデは、この者達が実際にその家に行つたかどうかを知るために、この者達に尋ねました。彼らはその家まで行つてはいませんが、



れに思つたといふことを語つていたのです。人口調査が終わり、ほとんどの人々が帰つて行つたので、宿屋の主人と妻は、家をこの家族に貸したが、奇妙なことに少し前に、その家族は東方からやつてきた見知らぬ人々の訪問の後、夜の間に姿を消してしまつたと語りました。ヘロデは博士達にだまされてとても怒り、密偵を首にし、軍の指導者達を呼び集めました。

イスラエルにでなく、ローマに忠誠を誓つているこれらのローマの司令官にヘロデは、ベツレヘムにいる二才以下の男の子をすべて殺すように命じました。そればかりか、ローマ兵はベツレヘムの近くのすべての町を破壊し尽くすことになつたのです。それは、その新しい「イスラエルの王」の家族がまだ近くにいると思われたからでした。司令官達は、「命令に従うか、死ぬか。」と言われました。もはやヘロデはユダヤ人であれ、誰であれ、自分のことをどう思うか全く気にしませんでした。彼の心は怒りで煮えくり返つていました。

兵士達は自分を守るつとすむひとりの男の気まぐれと欲望に従つて、ベツレヘムとユダの町の罪もない子どもを虐殺し始めました。兵士達は子ども達の父母を押し退けて、剣や鉄の槍で

罪もない子ども達を突き刺しました。兵士達は次々と町を襲い、哀れに思うこともなく、罪もない者を殺すことをやめてくれるようにと懇願する叫び声も気に留めずに、冷酷に与えられた仕事をこなしました。母親や父親の懇願の声はそのあたり聞こえませんでした。とても大切にされ、希望と家族の愛の中で生まれた幼な子達は今、床の上や、土の中や、自分が流した血の海の中に横たわつていました。

それから軍隊はラマの町へ侵攻しました。ラマとは「高い所」という意味でした。殺戮が始まりました。ラケルは自分の子どもが殺されるのを防ごうとしました。が、命の血が身体から流れ出て、我が子が命を失つた時、彼女は怒りと悲しみのあまり天に手を差し伸べ、神に向かつて、何故なのでしょうか。」と叫びました。そして涙が彼女の目から溢れだしました。自分の欲望を満たすために、神から与えられた命と家族の価値をないがしろにした権力者が、価値観を危機にさらし歪めたことから、この子ども達を虐殺することが生じたのでした。

エレミヤは神から授かつた神の知恵によつて、このことを見ていたのです。神の言葉は成就されました。しかし、彼は人類への神の贈り物を人間の虐殺と

利己主義から守つたのです。エレミヤがヘブライ語に通じていたためにわかつていたことが他にありました。ラマという言葉自体が、あることを物語つていたので。偶像崇拜の舞台としての「高い所」という意味のその町の名前は、ラマという言葉が語源で、それは「投げ付ける」特に「射つ」、比喩的には「欺く、又は裏切る」という意味なのです。

偶像崇拜の現代にあつては、私達は自らを欺いて、もし子どもが自分達の快楽や欲望の妨げとなるなら、子どもを不要なものとして投げ捨てたり、見捨てたりしてよいと信じています。今や女性達は胎内で守られている子ども達を裏切つています。女性達は、殺人者が胎内にいる罪もない者を鉄の器具で刺したり切りついたりするのを許しています。罪なきものの殺戮をやるように叫ぶ声を気にも留めずに、与えられた仕事を冷酷に実行しています。罪もない子ども達を守るどころか、彼女達は今、無差別の大量虐殺を歓迎し奨励しています。命の血が子ども達の小さい身体から流れ出る時、子ども達は自分が流した血の海の中に投げ捨てられるのです。女達が泣かないのは今の時代だけなのです。

# 本当に動かしているのは誰か

我々は時に、誰がこの天と地を創ったのか忘れてしまいそうになる。我々自身をそして赤ちゃんを創り出したのは誰かということも。人間の持つ力と知恵ですべてをコントロールできると思い込んでしまった我々は、世の中を本当に動かしているのが誰かを忘れている。

せず、子どもはもつと先でいいと言っていた夫婦が早々に妊娠してしまったり。子宝の仕組みは我々には把握できない。「どうして？」と我々の目には不公平に思えても、神でない我々には説明しようがない。

人間の理性には限界があるので、すべてを理解して万能なる天の父に頼ることになる。

子どもを作る作らないを完璧にコントロールできるなら、別に結婚することはない、という意見をよく耳にする。科学技術を過信し、もし凶と出ても、お金を出せば「望ましくない失敗」の産物である自身の命を簡単に除去してもらえ。赤ちゃんが欲しくてもなかなかできない時も、科学に頼って「製造」してもらおう。周囲の情報をうのみにするのは簡単だが、それは同時に神の存在と神が我々に用意した計画を無視することになる。

望めばいつでも子どもが作れると思っている人、世間には必死に取り組んでも子宝に恵まれない夫婦もたくさんいるのを忘れてはいないか。不思議なもので、赤ちゃんを作ろうと「万全の態勢」をとっている夫婦は妊娠

より賢いと思うのは、明らかに

間違っている。神は神であって、人間は神ではない。神が人間ひとりひとりのために考えている計画は、我々の想像範囲をはるかに越えている。神の計画やそれを行う時期を知ることができないが、神に向けて心を開き、日々の生活の中で神を感じながら暮らしていれば、神の計画はどんな時も最善であるとわかるだろう。ひとり多く子どもが生まれても、子宝の恵を授けられなくても、自分以外の誰かと共に暮らし、子ども達へ愛を持って接することは可能だ。もうひとりを受け入れる心の余裕がない人がいるだろうか？我々の助けを必要としている「不意の」客や子どものために部屋と食事を提供するのを拒む人がいるだろうか？神は人間とは異なる方法で手を貸して下さる。人間を愛する神は、何が我々にとって最善かを知らずくしている。例えば我々自身が気づいていなくても、「不意の、予定外の、ひとり多い」子どもは、我々の手をとって天国へと導いてくれるに違いない。いつかわかる時が来る。

間違って

間違って

間違って

間違って

## 正しい選択

私もちょうどあなたのようにだった。まだ学校に通っていたのに妊娠してしまった。ほんの少しの幸せと喜びを人生に求めていた。あなたと同じように、それが一番必要だと感じていた時だった。でも、あなたが求めているものを既に手にしている事あなたにはまだ分かっていないと思う。あなたの子どもは、あなたのおなかの中で急速に成長していて、その心臓は鼓動し、人格だつて形成されているの。この小さな奇跡が、あなたの人生を変えてくれるはずよ。実際もう変わり始めているはず。あなたは、自分の人生が悪い方向に変わってしまったと思っているんじゃない。両親にも話せないでいるかもしれない。子どもの父親は、あなたを捨ててしまったかもしれないし、友達すら離れていったのかもしれない。それがどんなに辛い事か、私は分かっているつもりよ。

なぜなのか幸せな気分になった。私の体の中で小さな命が育っていると思うと、その子が最初に笑った時、最初に歩いた時、私を抱きしめてくれる日を夢見る事があった。そう、あなたの人生は変わった。今では、子どもが最初にする何もかもを目にする楽しみが出来た。神様は、時々はつきりそうとはわからない形で幸せを与えて下さるのよ。

私

私

私

私

私

私

# 日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

「中絶に反対する運動」

〒780 高知市新本町一丁目7-31

電話/Fax 0888-73-3619 e-mail: nvt56n@ps.inforyoma.or.jp

## 会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円  
一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

## 事務所時間:

月一金 01:00 - 17:30  
日のみ 10:30 - 14:00  
土曜日 休み

## 御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店  
口座番号: 0573553  
日本プロ・ライフ・ムーブメント  
郵便局: 「郵便振替」  
現在口座番号: 01660-5-39607  
日本プロ・ライフ・ムーブメント

## 初春のお喜びを申し上げます

事務所便り

毎日が「あっ」と言う間に、殊の外、早く過ぎ去ってしまった昨年でした。ビデオやパンフレットなどのプロ・ライフ資料をご注文下さった方、ご自分の担当している中学生や高校生の「沈黙の叫び」などのビデオを見ての感想文を送って下さった先生方、お友達を紹介して下さった方、寄付を御送り下さった方、記事を書いて下さった方: ああ、皆、それぞれの立場で、小さい生命のために頑張っておられる。皆様、お一人、お一人のご協力のおかげでこの運動を続けていける事が出来る、とありがたく思う日々でした。

新しい年を迎え、更に、幅広い活動を事務所では願っています。プロ・ライフのグループ作りや近くの病院へいのちの福音のメッセージを伝えることなど如何でしょうか。どうか、この運動のために何が出来るかお考え下さって、それぞれの場所実践して下さいますように心よりお願い申し上げます。それに、ご自分のニュース分だけではなく、だれかのために、くれぐれも寄付をどうかよろしくお願いいたします。事務所でも今年も勇往邁進の言葉を心にとめてがんばりたいと思います。

先日、県立図書館で、「母子保健情報・第35号」(一九九七年七月)「ビル特集号」(厚生省寄贈)という一冊の雑誌が目にとまりました。普通、私たちは避妊薬・ピルは排卵を抑制するものと考えがちです。そして、産婦人科医にピルのことを尋ねると排卵抑制剤と教えられます。でも、その雑誌の51ページに北村邦男医師の文章で自分のクリニックで広く行なっている性交後避妊法として受精卵の着床を阻害するピルの配合について書かれていました。私達が知らないうちに中絶させられてしまっている可能性もあるのです。中絶反対だけではなく、精子、卵子という弱い私達の生命の基から大切に教育がもっともつと必要となってきました。

日本プロ・ライフ・ムーブメント

様はどれだけあなたを愛して下さっているかを証明して下さいているのよ。もし、この神様のご意志を受け入れたならば、この子どもを通じてあなたがより神様に近づく事が出来るように導いて下さるはず。あなたがどんな生活をしていようと、神様はあなたを愛し、許しを乞えば許して下さいます。神様は、あなたの人生を素晴らしいものに変えて下さる事も出来るし、あなたの子どもも人生だって同じ。でも、そのためにはまず、神様が差し出して下さった贈り物を受け取らなきゃね。これから辛い時もあるかもしれない。でも、幸せな時がその辛さを帳消しにしてくれると思うの。子どもの心臓の音を最初に聞いた時やおなかを蹴るのを感じた時、それはとても幸せな気持ちよ。

中絶が法律で許されている事は知っていると思うし、たぶん中絶を考えた事だつてあるんじゃないかな。でも、あなたが今経験している辛さなんて、中絶した後を経験する苦痛や孤独とは比べ物にならないほどなんでもないものよ。中絶を経験した女性は、いつまでも自分がしでかした事について思い悩むわ。心がかたつぽで、孤独でたまらなくなるの。だから、中絶なんてしないで。

中絶は解決になんてならない。それは、誰にも経験させたくないような痛みがいつぱいつまっ暗い穴のようなものなの。片親だけで子どもを育てた子どもをほかの夫婦の養子に出したりする事は、難しい事に思えるかもしれないけれど、出来るはずよ。あなたがどんな苦痛を経験しても、子どもに命を

与えてあげることが価値のあることなのよ。最初に子どもを腕に抱いて、あなたを見上げる小さな天使のような顔を見た時、神様の愛を知る事が出来るわ。そして、その子を自分で育てようと養子に出そうと、神様はあなたの側で支えてくれるはずよ。

そう、あなたの人生は変わった。これをいい変化にするか、悪い変化にするか、それはあなた次第。正しい選択をしてね。愛を選び、神を選び、そして命を選んで！

キャシー・ブラウン

## 胎児も人間

私は「声なき叫び」のビデオを見てとても衝撃を受けた。多分、中絶する女性が多いのはほとんどの人が人の生命を軽く考えているからだと思う。人の生命はとても大切だということを私達はもっと認識しなければならぬ。それと同時に、胎児が人間であることも忘れてはいけない。胎児は私達と変わらない人間である。人間としての尊厳もあるし、生きる権利も持っている。その権利をふみつぶすのも人間である。しかしその権利は決して他人に奪われるものではない。私達は胎児を一人の人間として考え、自分達の欲望だけの性行為はするべきではない。目先の利益にばかりとらわれるこの世の中だからこそ私達はもっと大切にしなければならぬ人の命について考え直すべきだ。

M・M(高校生)